

桜井氏の滑稽さ

生きることなく、死ぬことなく、彼は道に迷う。

江原 順 美術評論家

桜井氏は1955年初めて東京で展覧会を開いている。この時私はダダ・シュールレアリズムについての講義に出席する学生であり、私のエッセイが桜井氏の目に触れ、そして私たちは初めて出会ったのである。

ダダイズムに続いて芸術家のタイプは二つに分かれる。つまり一つはエルンスト、ダリ、ミロのように独自のスタイルをもつものであり、もう一つはマルセル・ジュシャン、フランシス・ピカビアといったスタイリッシュな、果てしなく繰り返される反建設的それである。前者はとりわけシュールレアリズムであり、後者はその永続性にもかかわらず厳格なダダイズムである。桜井氏は正当なダダイズムに属するのである。

アンドレ・ブルトンがフランシス・ピカビア宛てた1952年12月1日付けの手紙の中に私たちは大変興味深い文章を見ることができる。「人の群れを脅かす芸術についての具象と抽象の取るに足らない言い争いのこの時に。」「ここにいる我々あなたの教えに全くもって苛立っているのです。それが大変非ペダンチックな教えであるためにその他多くの人々を従わせるようなものであるとしても。私たちは絵画における＜抽象化＞というものが190年ごろあなたのほんの気粉れから生まれたことを忘れていません。」「もしあなたが自身が何かを持っているとおっしゃるのならば、それはあなたが道に迷ったということをもっとよく示してくれる証拠でしょう。」だれがこのように話しているのだろうか？それは画家ではなく、おそらく心だろう。私はこの文章を最近出版されたばかりの＜禅思想における精神的否定＞の中から引用している。

ブルトンは「私たちにまで押し寄せてきた禅の薄片とダダイズムは相容れなかったとおっしゃってください」と言っている。

芸術におけるペダントリーは私たちが他の諸理論を用いながら作品を作り上げていっていることを示唆している。つまり自己の欠如である。アンドレ・ブルトンの仏教に関する知識は少なくともパリでシュールレアリズムの第一回展覧会が開かれた1938年以前にまでさかのぼるものである。その時のカタログは「シュールレアリズムに関する要約的辞典」と名付けられ、その中でシュールレアリズムは以下のように定義付けられている・・・それは「エスプリには何らかの点というものが存在することを信じ、その点から生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能なものとそうでないもの、高いものと低いものなどが矛盾のうちに認識されたものであることを止めてしまっているのである。シュールレアリズムの活動の中

に(二元論の全体的否定という)この点の決定を望むということ以外のモチーフを見つけようとするは無意味である。」桜井氏はカリフォルニアで「それはまるで私が新興宗教のスーパーマーケットの中に我が身を置いたようなものであり、そこでは全てのオリジナリティーというものは概念的に認識し得るものではなく、また西洋も東洋も認識し得るものではなかった。」と言っている。

自分自身を目覚めた者だと主張する人は誰でも、その目覚めは跡形の無いものである。そしてまた作品の中の道化たちは声をあわせて楽しくささやいているのである。「私は一生のうち一度も＜悟り＞(目覚め)と呼ばれている不粋な仲間を持ったことはない。」禅の大家、一休上人のことばである。